

# 大地

19号  
1991. 7. 10  
真宗大谷派浄国寺  
☎(23)5724

## 新しい畳で

「窓々を明けて徹かびふく青畳」 睦

本堂の畳が新しく替えられました。もともと本堂そのものが七十六年前の大火の時の仮御堂で、それがそのまま来たものです。ですから土板自体が傷んで取り替えをしたり、だましながら来ていましたから、果して畳を替えてもどうなることかと少し不安でした。五十七枚の畳を全部入れ替えて頂いたところ、以前は少しふかふかしたり波うったりして実に心もとないものでしたが、とてもしっかりして、明るく広い感じになりました。

この畳替えの費用は、檀信徒の皆様からお納め頂く護寺会々費から出して頂いたものです。

会費の方も、世話人のご足労を得て

順調に納めて頂き、六月十日には本山への上納金も納付することができました。

ご報告傍々、御礼申し上げます。

さて、八月七日に「永代読経・お盆・戦争犠牲者追悼法要」が例年のように勤められます。

今年も、新しくなった青畳の上で、一緒におまいりをし、ご法話を聞きましょう。

## お墓まいりについて

こゝ十年程の間に境内地に新しい墓が随分増えました。昔は大家族制の下で、今のようないろいろな形でお墓を建てることはあまりなかったのですが、これも時代のなのでしょう。以前は門徒の方の希望の所に思い思いに建てていましたが、今は広さも四尺四方におさめて頂き、墓碑銘も宗派の形に沿ったものにして頂いております。

さて、お盆やお彼岸はもとより、それぞれのご命日にお墓参りをなさる方が絶えず、新しい花に替っているとホッとしますが、近頃少し気になることがあるのです。

本堂の裏側から墓地に入って、自分のお墓だけをおまいりして帰られる人が多くなっているようです。車を駐車場に置いたら、出来れば正面から入って、まず本堂のご本尊におまいりをして下さい。

真宗大谷派浄国寺の門徒（一般には檀家といわれますが）になったということは、浄土真宗の教えを聞いていく身になったということです。

「帰命無量寿如来」という聞き慣れた偈文は、数限りない多くの命の声を聞く、ということ。身近な人を供養するところと止まらずに、まず身近な命につながる多くの命の声を聞きましょう。

忙しくあわただしく墓前のおまいりを済ませるのではなく、ご本尊の前で心静かなひとときを過ごして下さい。

## 永代読経・お盆・戦争犠牲者追悼法要のご案内

八月七日 十時半より読経

十一時より法話

栗原・光源寺

山崎順正師

おとき

## 頭陀袋の中に

山崎隆昌

齡を重ねることがとても難しい時代になった。

やがて「ねたきり」や「痴呆症」の老人となり、苦しみもがく自らの姿を想い憂鬱になるのだ。

今や女性八十二才、男性七十六才という平均寿命の時代。誰もがそのような姿になる可能性が大きいのである。

この老残の恐ろしさから逃れるために「ポックリ寺信仰」が大流行りといわれる。医学が高度に発達したこの時代にである。ただ、この有様を「アホな、そんなものは迷信じゃないか」と簡単に片付けられない何かがある。

生業（なりわい）とは、生活を立てるための仕事を云う。業（ぎょう）そのものも生活を支える仕事の意である。職業、農業、商業、企業等々。

ところで、おかしなことに仕事についてはいろいろと考えられても、立てられ、支えられている「生活（生きるこ

と死ぬこと）」についてはほとんど考えられることはない。例えば「あなたのお仕事は？」と聞かれることはしばしばあっても、「あなたの生き方は？」と聞かれることはめったに無い。僕自身、目の前の身過ぎに手一杯で右往左往する毎日である。「僕が暇な時」とは、この仕事についていない時間をいうような状態になってしまっている。極論を承知であえて言うならば、人間の価値基準の第一を仕事（職業）に置く間違いが、進学戦争や、公害や、汚職政治、その他もろもろの狂いを生ずる原因と考える。そしてその価値基準の縛から逃れられない僕自身がそこにいる。

仏教では業（ぎょう）を業（ごう）という。業を煮やすのそれである。辞書には「善悪の業は因果の道理によつて後に必ずその結果を生むというのが、仏教及びインドの多くの宗教の説」（広辞苑）と説明されている。

親鸞聖人は數異抄の中で「（略）卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずということなしとするべし」（略）「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とり

をとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひとまただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」（略）（十三章より）と述べられている。

人々が、何よりも仕事（お金）を第一としたもろもろの狂気の沙汰も、日常の身過ぎ世過ぎに右往左往することも、業のもよおしであると教えられている。

その自覚のうえに弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり、されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」（同十八章）が生まれる。このように書いたが、僕にはこのところがよく解らない。解らないけれども問い続けなければならぬと思う。とにかく僕のなかで、問いを連続させることが大切であると考えている。

インドの詩人タゴールが、その死直前に書いた詩に

こんどのわたしの誕生日に、わたしはいよいよ逝くだろう、わたしは身近に友らを求める――

彼らの手のやさしい感觸のうちに  
世界の究極の愛のうちに  
わたしは 人生最上の恵みをたずさえて  
行こう。

人間の最後の祝福をたずさえて行こう。  
今日 わたしの頭陀袋は空っぽだ—  
与えるべきすべてを

わたしは与えつくした。  
その返礼に

もしなにがしかのものが—  
いくらかの愛と、いくらかの許しが  
得られるなら、

わたしはそれらのものをたずさえて  
行こう—

終焉の無言の祝祭へと  
漕ぎ出すときに。

一九四一年五月六日 朝

(「タゴール著作集」第二卷)

(森本達雄訳)

と記す。

僕は自らの頭陀袋になにを詰めて死  
の川を渡ろうとするのか。それを問い  
続けたい。

齢を重ねることがとても難しいこの  
時代に。



## 今を生きる

山崎 睦



昭和四十九年の秋、「甲状腺癌」のた  
め入院手術以来、主人は幾度かの入院  
院を繰り返してまいりました。

それから5年が過ぎた年の5月に主  
人にとって待望であった当寺の庫裡新  
築の世話人会の相談もようやくまとま  
り、これからいよいよ実行という時で  
した。4度目の入院、検査の結果、主  
治医の先生より、とうとう癌は肺に転  
移していること、そして余命はさほど  
長くないことを聞かされました。覚悟  
はしていたものの、からだ中の血が一  
気に抜け去ってしまうような感覚を受  
けました。

別れまでの短い日々をどのように過  
ごしたらよいのか、頭の中は、いろい  
ろなものが絡み合いぐるぐる廻るよう  
で考えも何も浮かびません。

とに角、後に悔いの残らないような日  
を送りたいものと、そのことだけを心  
に思い決めました。

人間は誰でも死と向きあっているの

だと、理屈では分かっている、その  
日を限られてしまうと、死というもの  
が、ことごとく頭から離れません。

幸い、本人も限られた生命であるこ  
とに気付いていないかのような元氣な  
暮らしぶりで、小さな孫たちも明るく  
なごやかに何もなかった様な毎日が続  
きました。

そうしたある日、日頃から尊敬してお  
りましたお方を訪ねました。そのかた  
はいつものように、にこにこ穏やかな  
笑顔で座っておられました。と一瞬、  
もう何十年も前に亡くなった私の母の  
顔が、その笑顔にすっと重なり母がそ  
こに座っているような錯覚に陥りまし  
た。同時に涙が溢れ、どうしても止ま  
らないのです。その方も黙って泣いて  
居られて、無言のまま、おいとま致し  
ました。帰りの道すがら、今までは母  
のことを思い出す暇もないような日々  
を夢中を過ごして来たのにと、何やら  
不思議な思いが致しました。

主人よりもう十年以上も長生きさせ  
て頂きました。自分の命は凶り知るこ  
とが出来ませんが、これからも死を見  
つめつつ、今を大切に生きたいと思っ  
ております。

## 死に際のこと

山崎 慎子

体調を崩して入院をしていた時、その同じ病院の、しかも同じ病棟に入院していた叔父さんが亡くなった。

血縁からいえば夫の叔父さんだったので遠いといえは遠いのだが、敬愛して止まなかった義父の、弟さんであったことと、叔父自身が魅力溢れる人であったことから、その死には、かなり深い衝撃を受けてしまった。

自分自身が病んでいる状況でもあったからだろうが、叔父が亡くなった日は一日中神経が高ぶって、溢れる涙をおさえることができなかった。夜になってもなかなか眠られず、ならばいっそ、と開き直ってつけたイヤホンから流れてきたのは、さだまさしの「防人の詩」だった。

おしえてください

この世に生きとし生けるもの

すべての生命に限りがあるなら

海は死にますか 山は死にますか

風はどうですか 空もそうですか

おしえてください

私は時折 苦しみについて考えます

誰もが等しく抱いた悲しみについて生きる苦しみと 老いてゆく悲しみと 病いの苦しみと 死にゆく悲しみと 現在の自分と

突然、そういう言葉をつきつけられ「は死にますか」という繰り返しは厭が上にも胸を震わせた。

病室は六階の眺望の良い所に位置していて、晴れた日は、妙高や南葉、板倉の山々が眩しい程の姿を見せてくれていた。

翌朝、耳底にこびりついた「山は死にますか、海は死にますか……」という詞を頭の中でリフレインさせながら、それらの山を眺め時折視界をよぎる、トビやカラスの翔ぶ姿を見ていて俄かに思った。山も死ぬ、海も死ぬ、人も鳥も木も、何もかも全てが死ぬ、全てが死んでそして全てが死なない。全てのものは次のものたちへ生命を託して死んで、そのことによって再びいきるのだ——と。

死に際はいとも安らかで、大きな吐息ひとつなく、眉をくもらせることもなく、眠りの延長のままに、静かな穏やかな最期だった。私は単純に、叔父のために、また残された家族のために穏やかな佇まいであった最期の姿を喜んだ。

初七日の頃であったか。叔父の思い出をひとしきり語り、その死に際の姿を子供達に話し乍ら「でも本当によかった。あんなに静かに逝ったのだから。あんな風に死ねたら良いなア」と、つい洩らした私に息子が答えた。「僕はそう思わないよ。」「ん?」「僕はね、死ぬ時はうんと苦しんでもがいて、みっともなく抗って死んで行くんだ。残された人が死んでいるのはこんなにしんどいのか、こんなに大変でみっともないものなのかって感じるような、そんな死に方」

息子が何故そんな風に考えるのかそしてどの位の深さでそのことを思うのか無論知るべくもない。いづれにしても、いかなる死に方をするかなど選べぬのだと改めて思い知りつつ、これからも、死ぬということの意味をたずね続けよう。

## あとがき

「大地」はもう止めてしまったのですか、という言葉を聞く度に、心が痛んでいました。ただただ黙ってお詫びする以外にありません。次号の約束をして自分自身を追いこんでしまおうと思いません。次号は十月に。

暑さの中で、永代読経・お盆・戦争犠牲者追悼法要を勤めます。せめて手次の行事にお運び下さい。

(慎)